

伝藤原為氏筆『源氏物語』藤袴巻の新出断簡

岸 本 理 恵

一、はじめに

源氏物語は平安期の文学を代表するともいべき作品であり、後への影響は極めて大きく写本も多い。しかし、現存する写本に平安のものではなくいずれも鎌倉以降のもの。鎌倉となると、紫式部が生きた時代からは二百年ほど降るのではあるが、源氏物語の写本としては鎌倉期のものが最も古いというのが現状である。

そのような源氏物語の鎌倉写本においては、つい先日、藤原定家の書写にかかる若紫の巻が一帖まるごと出現したという驚きの発表があった。これは全五括六六丁からなる綴葉装で、大きさは縦二一・九センチ、横一四・三センチとい^①う。既に知られている定家本の花散里・行幸等と大きさが共通することか

ら一具のものと認められ、定家の写本であるということ、のみならず現存する源氏物語の写本として最も古い部類のものであるということでも貴重な発見であった。

一方、鎌倉期の写本として、定家本とは別に『尾州家旧藏河内本源氏物語』（以下に尾州家本と略称^②）の存在がある。大きさが基幹巻でおよそ縦三二・〇センチ、横二五・五センチという大四半で、その大きさが印象的な写本である。この尾州家本とは別ながら、同じく鎌倉書写の、もとは縦三〇センチを超える四半本と思われる源氏物語の古筆切が複数存在することが知られている。その多くは藤原為家筆と極められ、一部は為氏や為相となつているものもある。これら一連のものと思われる古筆切は小林強氏^③や高田信敬氏^④によって集積されている。中でも薄雲巻の多くは実践女子大学に所蔵され、『実践女子大学所蔵

源氏物語関係古典籍図録Ⅰ』⁵⁾にまとめて写真が公開されるほか各種報告されている。これらに関連深く、また一部のものとはツレと思われる藤袴巻の古筆切一葉を閲覧する機会に恵まれたので、以下に紹介するとともに、一連の伝為家筆大四半源氏物語との関係について、些か私見を述べたいと思う。

二、藤袴巻断簡の紹介

ここに紹介する古筆切は、聴松室の所蔵になる手鑑「精虔」に押されたもので、為氏と極められる一葉（以下これを断簡Ⅰとする、図版は本稿末に掲載）。大きさは、縦三一・一センチ、横一六・六センチ。切の右側には、一時期に卷子装であったことによると思われる皺がある。本文は次に翻刻するとおり八行で、所々に朱点がある（朱点は「・」と翻刻した）。

- 1 たまふなれ・宮などのいとれんしたまへる人にて・いと
- 2 心ふかきあはれをつくし・いひなやまいたまふに・心や
- 3 しみたまへらんと思なん・心くるしき・されとおほはらの、
- 4 行幸に・うへをみたてまつり給ては・いとめてたくおはし
- 5 けりと思給へりき・わかき人はほのかにもみたてまつり
- 6 て・えしもみやつかへのすちもてはなれし・さ思てなむ

7 この事もかう物せしなどのたまへは・さても人さまは
8 いつかたにつけてかはたらひて物し給らん・中宮かく
藤袴巻の、源氏と夕霧が玉鬘の処遇について話す場面（『源氏物語大成』九二二頁一〜七行目）。本文を、河内本系尾州家本・青表紙本系大島本と比較すると、主な異同は次のとおり。⁶⁾

（断簡Ⅰ） （尾州家本） （大島本）

- | | | | |
|---|-------|-------|--------|
| 1 | たまふなれ | たまふなれ | たまへれ |
| 1 | いとれんし | いとれんし | れんし |
| 2 | たまふに | たまふに | 給ふになん |
| 3 | 思なん | 思なん | おもふになん |

一行目冒頭、「たまふなれ」とあるのは、河内本系では尾州家本だけでなく、高松宮家本・平瀬本・鳳来寺本・大島本・岩国吉川家本にも一致する一方、「たまへれ」とするのは青表紙系諸本のほか陽明文庫本や保坂本も同然である。同じく一行目、「いとれんしたまへる人」の「いと」を持つのは河内本系の六本すべてにおいて一致するのに対し、青表紙本系の諸本は「いと」をもたない。なお、断簡Ⅰ・尾州家本・大島本の三本には異同がないが、八行目「たらひて」を「たくひて」とする諸本があり、河内本系のうちにも高松宮家本に見える。しかし、河内本系において他五本は断簡Ⅰと一致して「たらひて」であ

り、高松宮家本自体の問題と考えるべきものである。この箇所は青表紙本系統の諸本にも両方の本文があり、複雑な様相を見せる。この一葉全体としては諸本に大きな異同のある箇所ではないが、断簡Ⅰは細かな点で河内本系と認められる。

ツレには、金刀比羅宮図書館蔵になる手鑑「古今筆陳」に押された一葉がある（以下にこれを断簡Ⅱとする）。こちらも縦三一・五センチの大型で、同じく八行、藤袴巻のうち、断簡Ⅰよりも少し先の部分で、柏木が父の使者として玉鬘を訪問するもよそよそしい態度をとられる場面（『源氏物語大成』九二五頁一四七行目〜九二六頁五行目）。藤原為氏筆と極められ、聴松室蔵の一葉と同筆とみてよい。この断簡Ⅱの二行目以降の七行は尾州家本欠脱箇所にあたるため、本文を尾州家本と比較は出来ないが、音便の表記などやはり細かな点で河内本系諸本と一致する。河内本系統諸本の内においてわずかな異同を見せるのが次の一箇所である。『源氏物語大成』（九二五頁一行目）「心ちなむ」を、大島本・岩国吉川家本は「心ちのみ」、対して断簡Ⅱ・高松宮家本・平瀬本・鳳来寺本は「心ちのみなむ」とする。とすれば、断簡Ⅱはこの三本に近いのかといえ、断簡Ⅰ八行目において高松宮家本には独自の本文が見えていたし、鳳来寺本は書き入れ等が多く、両本ともに断簡との特別な親近性

がある本とは言いがたい。すると消去法的に平瀬本が近いということになるが、現段階では上記の二葉のみのことであり可能性に留まる。

この断簡Ⅰ・Ⅱと尾州家本についてもう一点指摘しておく。尾州家本には脱落部分があるため比較できるのは断簡Ⅰの八行と断簡Ⅱ一行目の都合九行分のみではあるが、両本は本文が一致するのみでなく、写本の大きさも、縦が三一センチを超える大型本であるという点で他とは異なる特徴を共有する。河内本系の本文をもつ諸本といえども、皆そのような大型本であるということはなく、例えば高松宮家本は縦二六・四センチ、横一六・八センチ、平瀬本は縦一五・二センチ、横一五・五センチの枳形本である。尾州家本とは朱点箇所もすべて一致し、その位置も行の中央のみ、朱点の大きさなど打ち方にも似通うものがあつて注目される。高松宮家本も朱点を持つが、一致しない箇所も複数あつて朱点も大きい。尾州家本と一連の伝為家筆大四半源氏物語との関係については、岡寛偉久子氏が「驚くべき一致を示している」と指摘するように、²⁷ただならぬ近さを示し、特に藤袴巻では断簡Ⅱが尾州家本の欠脱箇所をもつので注目される二葉である。

三、伝為家筆大四半源氏物語との関係

上記の藤袴巻断簡について考えるためには、一連の伝為家筆大四半源氏物語との関係が問題となる。そこで、伝為家筆大四半本について整理しておくこととする。現状は卷子に改装されているもの、古筆切として数葉のみ伝存する巻などさまざまであるが、合わせると二〇に近い巻が現存している。これらを僚巻と見るかどうかについては、高田信敬氏が同筆と見なすことができる賢木・薄雲・真木柱の三巻のみがツレとした上で、それ以外は「それぞれに五四帖の一揃を代表すると見た方がよいかも知れない」「同筆同型であつても一具をなしていたとは断定しえない」と慎重な姿勢を示している。

しかし一方で、小林強氏は「寄合書の僚巻である可能性は多分にある」とし、岡嶋偉久子氏も「むしろ僚巻である可能性を限りなく推測させる」と述べる。両氏が示すその理由は次の点にある。

①一筆ではないものの、すべて同時代鎌倉期筆と認定できる類筆であること

②本文は一面一行（天理図書館蔵蓬生巻のみ一〇行）、和歌の改行は字下げという書写形式で、いずれも原装は伝存

が稀な縦三〇センチを越す大型冊子本であつたこと

③巻単位で現存するものと各断簡を合わせて重複した本文がないこと

高田氏の指摘するように、たとえ巻々が相互に共通する特徴を有するとしても、一揃のものであつたと判断するのはなお慎重であるべきものである。それは同筆であつたとしても同じことで、同一人物が複数回にわたり源氏物語を書写する例はいくらもある。藤原定家筆の源氏物語においても、明らかに異なる揃いであつたはずの四半本と六半本（『奥入』に残存した源氏物語本文箇所）に、同一人物の筆が認められる。それでも、岡寫氏が「伝存が稀な」と形容するごとく、縦三〇センチを超えらるといふ特徴的な大きさは、尾州家河内本を除いて源氏物語の写本として他に幾らもあるものでない。そもそも、鎌倉期書写の源氏物語としては六半本が多い中で四半の、しかもこの大きさを有することについては、高田氏も「その堂々たる風格は群籍を圧する」と指摘するとおりであり、これらの伝為家筆大四半源氏物語の特異な点といえる。また、今のところ本文のほとんどが重ならないという状況もまた重視すべきものである⁸⁾。そうしてみると、伝為家筆大四半源氏物語の古筆切や各卷子または各帖を、それぞれ全く別の源氏物語の一揃と考えるのもまた不自

然で、極めて密接なものと思えるほうが自然であろう。中には、今後の研究によって一揃いの例に外れるものが出てくるかもしれないが、その区別の指標を未だ見出し得ていない現状では、一旦は一連のものと考えるのが穏当と思われる。

五四帖に及ぶ源氏物語にあつて、複数人で巻ごとに書写を分担する寄合書は珍しくない。藤原定家の『明月記』にも「家中小女」に書写させたとある記事なども周知のごとくである。寄合書の場合、筆が異なれば全く異なる印象であることも少なくないが、一連の伝為家筆大四半源氏物語はそれぞれの筆が似通うがゆえに、写本の特異な大きさと相俟つて、強い関連性を思わせる印象を与えている。これら類筆の様子について以下に検討してみたい。

冊子や卷子の状態および古筆切など現装の形態はさておき、一連のものとして現存すると小林氏・高田氏等の先行研究によつて報告のある巻は、帚木*・夕顔*・若紫*・花宴*・賢木*・明石*・蓬生*・薄雲*・少女*・常夏*・藤袴*・真木柱*・梅枝*・藤裏葉*・柏木*・鈴虫*・夕霧*・幻*・竹河*である（*印を付したのは写真等を確認できたもの）。

このうち薄雲・賢木・真木柱の三巻については高田氏も同筆でツレであると認めている。小林氏はこれに加えて蓬生（天理

図書館蔵伝為家・為相筆本）の冒頭一〇行についても同筆と指摘、岡寫氏もこれを認めている。また、これらの筆について田中登氏も「全体にやわらかく細い線が目立つ」として同筆と認め、これに対し他の帚木・花宴・蓬生・藤裏葉・柏木・鈴虫・夕霧・幻については「力強さを押し出した後京極様」と区別している⁹⁾。こうした先行研究の指摘のとおり薄雲・賢木・真木柱・蓬生冒頭一〇行は同筆と認められるもので、田中氏の指摘のように、線が細く流れるようではやわらかい。これを今仮にA筆とする。これ以外の巻は側筆が目立ち、のために太い箇所もあつて力強く、後京極様と評されるとおりの筆である。こうした字の趣・筆の勢いなど極めて類似した様子を見せる巻々ではあるものの、A筆以外の全てが一筆であるかどうかはなお検討を要すると思われる。ただし、今はその区別する基準を見出し得ていない。あえて挙げておけば、藤裏葉と夕霧は酷似していると指摘がある¹⁰⁾。また、本稿で紹介した藤袴は、花宴と特に近い様子を見せていると思われる。

A筆による巻とA以外によるものは、よく見れば異筆であるものの一見すると似た印象があるのも事実で、岡寫氏や小林氏は類筆とされる。類筆と思わせるのは、全体として筆の勢いや筆致、朱点の様子など趣が似通うゆえであるのはいうまでもな






い。なお詳しく比較してみると、A筆には細くやわらかい全体の様子とは対照的に極端な側筆が一部に見られ、それがA以外の筆と類似している。その特徴的な文字「御」「み」を〔図1〕に集字した。

「御」の字は、各巻とも左側の縦画を極端に太くする字が多い。全体としては細く伸びやかなA筆にあつては特にこの字が目立っている。A以外の筆にも多く見られ、一文字だけ切り出した〔図1〕では、別筆であると区別が難しい程に酷似する。

「み」の字は、上から左下へ伸びる一画目が、A筆でも側筆の太い線となるものが目立ち、A以外の筆ではさらに太く強調される。また、この画に続く、左から右へ横に渡る画が緩やかに弧を描くさまは、集字してみると別筆であるのにきわめて親近性を感じさせる。

つまり、A筆とA以外（複数の筆に細分される可能性もある）の筆は、別筆でありながら特定の文字においては特徴が一致するのである。これは、複数の書写者が、特徴を共有しようという意図のもとに、あるいは自然と共有してしまうような環境のもとで書写した一連の写本であるということではないか。すなわち、一つの工房とも言えるような集団・場において監督書写によって作成された写本であるということが思わ

〔図1〕

| み | | 御 | | |
|--|---|---|---|---|
| A以外 | A | A以外 | | A |
| 花菱 | 賢木 | 夕霧 | 藤袴 | 賢木 |
|  |  |  |  |  |
| | 薄雲 | | 若紫 | 薄雲 |
| |  | 竹河 | 花菱 | |
| | |  |  | |
| | | | |  |

れるのである。

というのも、監督書写ということを考えてみると、藤原俊成が多くの私家集等を自らの監督のもと娘の坊門局ら周囲の人々に書写させたものが現存している。これらの写本では、俊成以外の人による部分の筆であっても俊成の筆に通ずる特徴を持つものが多い。藤原定家の監督書写本でも、やはり肥瘦の差の大きな定家の字の特徴を、定家以外の筆でも有している写本が多

くある。こうした写本や古筆切には、現代の我々から見れば明らかに定家でないとは判断されるものであっても定家筆との極めが多く付されている。そして、監督書写は俊成・定家だけでなくその息為家も行なっていたようであるし、御子左家のみならず、鎌倉期の写本の中には、西山本や真観本などにも集団で書写に取り組んだ一連の写本群が確認されている。

また、天理図書館蔵蓬生巻は、冒頭一〇行すなわち原装の冊子本では第二丁表のみがA筆で、以下は巻末まで別筆が書写している。これをうけて田中登氏は「俊成や定家のいわゆる監督書写本に比して考えてみることもあるいは可能かも知れない」と指摘する。定家監督書写本にあつては、冒頭を定家、続きを別筆が書き継ぐ写本は多い。私家集のみならず定家本源氏物語でも、現存する五帖のうち柏木巻が冒頭定家で以下は別筆となっている。

こうした状況をふまえると、一連の伝為家筆大四半源氏物語の巻々は、同一の場で監督書写のような方法をもって書写されたものと考えるのが妥当のように思われる。とすれば、本稿で紹介した藤袴巻の古筆切を一連の源氏物語の中において考えたと見えてくるのがいくつつかある。このことをもう少し検討してみよう。断簡Ⅰ・Ⅱともに縦三一センチを越えること、河内

本系の本文を持つこと、筆跡は一連の類筆とも認められ花宴巻に特に近いものであることが共通点として挙げられる。卷子皺が見られるのも、花宴・蓬生・鈴虫など現在では卷子仕立てで伝わる巻と同様に、古筆切となる以前は卷子装の時期があるのであろう。

共通しない点もいくつつかある。断簡Ⅰ・Ⅱともに為家ではなく為氏と極められる。しかし、柏木巻や真木柱巻の古筆切など一部に為氏と極められるものがあり、鑑定にも幅があるのであろう。また、多くが一面一一行であるのに藤袴の二葉ともに八行という点については、三行程度切り取られたものと考えられる。一面一一行の巻では横幅が二六センチ程度あるのに対し、断簡Ⅰは一六・六センチと不足している。賢木巻の切のうち八行のものは横一六・六センチで一致するので、切り取られた結果、八行となったものとみて良さそうである。ほかに、一行の字数が断簡Ⅰ・Ⅱともに二三〜二六字で、他の多くの巻が二〇字程度であることと比べるとやや多い。しかし、これも他の巻を詳しく見ると、藤裏葉巻では二丁表は二二〜二四字とやや多く、柏木巻の第二紙以降の部分でも二三〜二五字の行が続いている。一行の字数にある程度の幅は認めてよさそうである。よって、藤袴巻の二葉は一連の伝為家筆大四半源氏物語のうちに含

めてよいものと言えよう。

四、おわりに

以上、新出の藤袴巻の一葉を紹介しつつ、伝為家筆大四半源氏物語について考察した。今のところ、これらの写本や古筆切は一連のものとみなすのが合理的なように思われる。そうすると、源氏物語としても最古写本ともいえる鎌倉期写本が二〇巻に及んで現存することの意義は大きい。尾州家本と密接な様相を見せるとい点においても、尾州家本の欠脱箇所を本文を持つていたり、補写巻である賢木巻には複数の古筆切が現存していたりするので、河内本本文の研究においても重要であり、積極的に活用していくべきものと思われる。ただ、そのためには現在知られているものについて、なるべく同じ状況で厳密な比較ができるよう集積させ、基準を定める必要がある。これだけの分量が現存するのだから、今後もまだ出現する望みもあるように思われる。今後新たな巻や古筆切が出現した際には、その基準に即して正しく集積に加えていくための準備としても有用であろう。

(注)

- (1) 藤本孝一「新出、定家本『若紫』の紹介―音読から読書へ―」(『二〇一九年度中古文学会秋季大会 大会企画シンポジウム・研究発表資料集』二〇一九年一〇月一三日)
- (2) 『尾州家河内本源氏物語』(八木書店・二〇一〇年)二〇一三年)
- (3) 小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」(本文研究)六・和泉書院・二〇〇四年五月)。小林氏の論文は以下これによる。
- (4) 高田信敬「源氏物語の古筆切 一題」(古代文学論叢 一三「源氏物語と源氏以前 研究と資料」武蔵野書院・一九九四年)。高田氏の論文は以下これによる。
- (5) 実践女子大学芸芸資料研究所編・二〇〇九年五月
- (6) 諸本異同は次の資料による。『源氏物語大成』(中央公論社)、加藤洋介『河内本源氏物語校異集成』(風間書房・二〇〇一年)、『源氏物語別本集成』『源氏物語別本集成続』(おうふう・一九八八年〜二〇一〇年)
- (7) 岡寫偉久子「天理図書館蔵 伝為家・為相筆『源氏物語蓬生巻』―『尾州家河内本源氏物語』との対校から」(『ピブリア』一三六・二〇一一年一〇月)。岡寫氏の論文は以下これによる。また、尾州家本について岡寫氏は「尾州家河内本源

氏物語の書誌学的考察―鎌倉期本文の成立―」（『源氏物語写本の書誌学的研究』（おうふう・二〇一〇年）にも詳述される。

(8) 注4高田論文には、縦三〇センチを超える『源氏物語』の写本として、天理図書館蔵と曼殊院蔵のふたつの蓬生巻を挙げている。ただし、縦三〇センチ以上、横二二センチ以上の大四半本のうち、「すくなくとも一帖以上のまとまりを持つものを、思いつく限り挙げる」として巻名・大きさ・本文系統・所蔵者のみを挙げられたもので、装丁や書写形式・筆の特徴について言及はなく、どこまで類似したものかは不明。

(9) 田中登「伝藤原為家筆『源氏物語』薄雲巻断簡の紹介」（『実践女子大学文芸資料研究所年報』二八・二〇〇九年三月）。ただし、田中氏は薄雲・賢木・真木柱・蓬生冒頭一〇行の他に若紫も同筆とする。

(10) 岡野道夫「源氏物語藤裏葉巻 解説と翻刻―日本大学総合図書館蔵伝為家筆本―」（『語文（日本大学国文学会）』四三・一九七七年五月）、『日本大学蔵 源氏物語 第十二巻 鎌倉期諸本集一』（八木書店・一九九六年）解説にも、この二巻について「同一筆者によるとも見られそうな近い筆致」とある。

〔付記〕 図版掲載を許可くださいました諸機関に御礼申し上げます。なお、本稿はJSPS科研費（16K02370）の助成を受けたものです。

（きしもと りえ／尾道市立大学准教授）

〔図版〕断簡 I

二條良為氏
書す
孝光



...